

## 「接触説」の認識論について

丸山, 望実  
九州大学大学院 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/4495890>

---

出版情報 : 哲学論文集. 57, pp.29-48, 2021-09-25. The Kyushu-daigaku Tetsugakukai  
バージョン :  
権利関係 :

# 「接触説」の認識論について

丸山望実

## はじめに

本稿はヒューバート・ドレイファスとチャールズ・テイラーが『實在論を立て直す』の中で展開する、「接触説 (Contact Theory)」の認識論に関する主張を主題とする。『實在論を立て直す』は認識論だけでなく、行為論や「媒介説」という彼ら独特の観点からの哲学史など、多くの主題に言及しているテキストである。

本稿で中心的に扱う認識論は、ドレイファスとジョン・マクダウエルの論争に基づいて議論がなされている。第一節で指摘するように、接触説は「飛躍の問題」と呼ぶべき問題を抱えている。接触説は、没入的対処と呼ばれる形態の行為によってもたらされる知覚経験と、信念との間の直接的な正当化関係の存在を主張している。しかし接触説において知覚は「非概念的」とされる一方で、信念は「概念的」なものとしてされている。したがって、両者の関係を正当化関係と呼ぶことには「飛躍」があるのではないかという問題である。他方のマクダウエルは、知覚経験が徹頭徹尾概念的であると主張する。したがっ

て、経験と信念はともに概念的なものであり、両者に正当化関係を認めることに一見すると問題は無い。しかし第二節で指摘するが、マクダウエルのこの知覚経験に関する概念主義は、強すぎる主張であるようにも思われる。

これらの点を踏まえ、本稿では〈知覚〉はあくまでも非概念的だとしてマクダウエルには同意しないものの、飛躍の問題を生じないような正当化のテーゼを説得的な形で示したい。そこで第三節では、マクダウエルの〈世界〉に関する主張を受け入れるべきだと提案する。彼は〈世界〉も自然言語によってすべて概念化されていると主張する。この主張に基づき、正当化の根拠を概念的な世界とのつながりから示せば、接触説の抱える「飛躍の問題」は回避可能ではないか。この飛躍の問題を回避できる、より良い認識論の立場を第四節で考察する。以上の議論を通じて本稿ではまず、マクダウエルとドレイファスの論争について〈知覚〉〈世界〉の観点から改めて整理するとともにその問題点を指摘する。そのうえで「飛躍の問題」という、これまで十分に認められていなかった問題点を指摘するとともに、それを回避できるような立場を示すことを目的とする。

## 一 接触説の認識論と「飛躍の問題」について

ドレイファスとテイラーの共著『実在論を立て直す』では、知識や思考は表象により成り立つとするマクダウエルらの立場が表象主義や「媒介説」と呼ばれ批判されている (Dreyfus & Taylor 2015, p.57 [邦訳九四頁] 等)。ドレイファスらは媒介説とは異なる「接触説」と呼ばれる立場を掲げ、「没入的対処である知覚によって獲得された信念は正当化されたものとみなすことができる」と主張する。本節ではこの正当化のテーゼを確認したのちに、そこには「飛躍の問題」が存在することを指摘する。

一― 没入的対処について

接触説の正当化のテーゼを理解するためには、信念の正当化の根拠となる「没入的対処 (absorbed coping)」という独特な行為についての考え方を理解する必要がある。知覚もこの没入的対処の一種であると考えられている。この没入的対処という考え方は、接触説の主張者の一人であるドレイファスによって提案された。

従来、行為をめぐる哲学的な議論の中では、行為は命題的内容をもった信念や意図が、身体動作を引き起こすことよって成立すると考えられてきた (Sartre 1983, ch.3)。この意図は、行為の成功条件の命題的な表象だと考えられている。例えば、「タクシーを停める」という行為は、「タクシーを停めよう」という意図によって、身体動作である手を挙げる事が引き起こされることで「タクシーを停める」という一つの行為となる。そしてこの手を挙げることは、実際にタクシーが停まること、すなわち「タクシーを停めよう」という意図の成功条件が満たされたときに成功した行為となる。

ドレイファスは、この命題的な心的表象が身体動作を引き起こすという見方に反対し、日常の行為の大半には心的表象が必要ないと主張する。このような行為が「没入的対処」と呼ばれる。例えば、サッカーの初心者が努めて「ボールをよく見て」「ボールの中心を蹴る」のに対して、熟達したサッカー選手はその状況の感覚に応答して流れるように行為をする。この熟達した「エキスパート」と呼ばれる段階のサッカー選手は、努めることなく最適なポジションに引き寄せられ、ボールを蹴る。この最適さは、ピッチや対戦相手の状況などによって構成される。

この没入的対処は「故障状態」に陥ることがある。故障状態とは、没入的対処を妨げるようなことが生じている状態である。例えば、サッカー選手の靴紐が急に切れてしまったとする。この時、シューズと靴紐はスムーズな対処を妨げる。このような状態に陥った選手は、概念的に思考して、例えば靴が脱げないように注意しながら行為する必要がある。この故障状態は、状況の物理的特性によってのみ起こるものではなく、「なぜ？」と尋ねられることや、その理由を反省することによっても引き起こされる。この返答には今行っている対処活動の停止と反省が必要だが、これは私たち人間にとって常に可能だ

という特徴がある。

ドレイファスは初心者としての行為を引き起こす働きなどを、命題的な意図や信念に認める。しかし、没入的対処の場面でこれらは必要ない。熟達したサッカー選手は「最適さ」(ドレイファス自身の言葉で言い換えると「最適なゲシュタルト」)に引き寄せられ、その最適さとのズレの感覚を引き下げないようにして行為を達成していく (Dreyfus 2001b, p.145-156)。

ここでは熟達したサッカー選手を具体例として挙げたが、没入的対処という行為自体は特別なものではない。私たちは日常の行為のエキスパートであり、ここには「知覚する」ことも含まれる。

## 一―二 接触説の認識論の概要とその問題点について

このような没入的対処としての知覚に基づく信念は、正当化されうるといのが接触説の主張である。この正当化に関する議論は、知識をめぐる「認識論」の領域で古くから展開されてきた。ここでは「知覚とは正当化された真なる信念である」と定義したうえで、この「正当化」がどのようにしてなされるのか、すなわちどのような条件の下で信念は正当化され知識と呼ばれるのにふさわしいものとなるのが問題となってきた。

典型的な内在主義者(特に「基礎づけ主義」とも呼ばれる立場)は次のように主張する。彼らは、ある信念は別の理由となる信念によって正当化されるとき、知識と呼ばれうると考える。例えばAさんが「明日晴れると知っている」と主張している。この時「なぜ知っているといえるのか?」という質問に対して「昨日サッカーの試合に勝ったからだ」と返答したとしても、Aさんは明日の天気について「知っている」とは認められないだろう。というのも、Aさんの昨日のサッカーの試合についての信念は、天気についての信念の理由となっていないためだ。Aさんが例えば「今朝テレビの天気予報で見たからだ」などと返答すれば、天気についての信念は正当化され、知識を持つっていると認められることになる。このように内在主義者は、ある信念は適切な理由となる別の信念が提示されるときに正当化されると考える。

以上のように主張する内在主義者は、接触説の正当化のテーゼに反対するだろう。実際にドレイファスらによって、次のような反論が予想されてくる (Dreyfus & Taylor 2015, p.62, 63 [邦訳 1011-1014頁])。没入的対処である知覚によって、例えば絵が傾いて見えたとしても、そこから主張できるのは絵が「傾いて見えたと」だけである。ここでは、「絵が傾いている」という信念の理由となる信念は与えられない。したがって内在主義者によると、ここでの「絵が傾いている」という信念は正当化されない。というのも彼らは、「正当化」とは信念主体のもつ理由となるような他の信念でのみ可能となると主張するためである。

これに対して、接触説は次のような正当化のテーゼを提示する。まず、私たちが没入的対処をする際には、そこで知覚される対象の一面面が顕著になる。例えばサッカー選手であれば、ボールの色や素材でなく、その弾力性や他の選手らとの位置関係が際立ってくる。この一面面についての知覚は没入的対処の最中であるから、非概念的である。しかし、1-1で故障状態と関連して確認したように、私たちは概念能力を持つ人間であるため、反省可能性を常に持つ。この反省によって、対象の顕著な一面面を言語化し、信念を形成することができる。この信念の形成を促す知覚に基づく対処が、期待した通りの反応を世界から受け取ること、すなわち没入的対処の成功はまた、その信念を正当化されたものとする。引き続きサッカー選手の例を用いれば、味方選手へのパスが通った時に、味方選手の位置やボールの弾力性についての信念は正当化される。<sup>1)</sup>したがって接触説は、没入的対処の議論に基づいて、知覚経験と信念との間の直接的な正当化関係を主張している。そして知覚は没入的対処であるために非概念的であり、信念は言語化された命題的態度であるために概念的なものである。この主張は主にマクダウェルとドレイファスの間で行われた論争に基づいている。この論争について第二節と第三節では、それぞれ〈知覚〉〈世界〉という観点から検討する。そこで示されるのは、ドレイファスは両者が非概念的だと考えていることである。

しかしこのように考えると、ドレイファス並びに接触説には「飛躍の問題」が生じるだろう。というのも、ここまで確認

してきたように、接触説は知覚経験と信念との直接的な正当化が可能であると主張するためである。そして詳しくは次節以降で確認するが、この〈知覚〉は非概念的なものであり、〈知覚〉の対象となる〈世界〉もまたドレイファスらによると非概念的である。したがって、接触説の主張は非概念的な〈世界〉と接触することもたらされる、非概念的な〈知覚〉が概念的な信念を直接正当化するという主張となる。ここには、最初から非概念的な要素が概念的な信念を正当化するという「飛躍」が存在するのではないだろうか。

例えば、マクダウェルが重要視するウィルフリド・セラーズによる「所与の神話説批判」は、命題的な構成要素を含まない単なる知覚経験と命題的態度である信念との間には、形式の違いがあるために、正当化関係を構築することができないと指摘している (Sellars 1997)。これと類似した指摘を、接触説に対してもできるだろう。接触説は非概念的な〈世界〉〈知覚〉が概念的な信念を直接正当化するという、形式が異なった二つの要素の間で正当化が可能だと主張しているためである。本稿では十分に論じることができないが、ドレイファスは自身の主張が、セラーズによる批判を直接的には免れていると考えている。ここには一定の説得力があるが、それでもなお「飛躍」という問題が残っている。この点について本稿では、「飛躍の問題」とラベルを張り替え改めて指摘するとともに、検討する。

他方マクダウェルは、言語が思考に本質的だとみなし、正当化関係として言語同士、すなわち概念的なもの同士の関係しか認めない。しかしこの主張を維持するために、マクダウェルは〈世界〉と〈知覚〉がすべて概念的に構成されていると主張する。第二節で検討するように、〈知覚〉についてのこの概念主義は強すぎるようにも思われる。

ここで、両者の議論は暗礁に乗り上げるように思われる。すなわちドレイファスは、没入的対処という非概念的な行為が存在しており、また正当化関係の内にも非概念的なものが含まれていると主張する一方で、マクダウェルはそれらが常に概念的だと主張している。両者の主張はともに一定の説得力を持っているが、同時に他方についての決定的な批判を示すことにも成功していない。したがってやはり、正当化関係や没入的対処を「概念的」と呼ぶか否かという水掛け論に近い状態に

陥っているのではないか。

しかし、彼らの論争をこのような評価で終わらせるべきではないだろう。そこで本稿では、論争を踏まえた第三の立場について考察したい。次節以降で検討するが、マクダウェルとドレイファスはそれぞれ〈知覚〉と〈世界〉に関する主張の内に困難を抱えている。またすでに指摘したように、ドレイファスとテイラーが掲げる接触説は「飛躍の問題」を抱えている。本稿では特に認識論に焦点を当て、飛躍の問題に陥らないような第三の立場を検討する。ドレイファスは非概念的な知覚経験が、概念的な信念を正当化できると主張する。しかし、両者の関係を正当化関係と呼ぶためには、知覚経験の根底に概念的な要素が必要ではないか。そしてこの点は、マクダウェルの主張から導出可能だと考えられる。それに対して没入的対処や、それに伴う〈知覚〉は非概念的だという点ではドレイファスが正しい主張をしていると考える。本稿で考察する第三の立場にとって重要なのは「言語」と「主体」という観点である。

## 二 論争の対立点〈知覚〉について

前節で確認したように、ドレイファスは〈知覚〉や行為には非概念的な要素が含まれていると主張する。この主張は、マクダウェルの「概念主義」に対する批判であった。本節では、両者の主張のポイントを特に〈知覚〉という観点から比較する。ここでは、ドレイファスらが実際にマクダウェルに対して提示している二つの反例である「前言語的 (prelinguistic)」なケースと「前命題的 (prepropositional)」なケースについて確認する (Dreyfus & Taylor 2015, pp.84-88)。「邦訳一三八―一四四頁」)。そのうえで、「前言語的」なものに固有の説得力はないが、「前命題的」なものに関する批判は説得力のあるものだということを示す。



## 二一 一 マクダウェルドレイファス論争の概要

この論争は、マクダウェルに対するドレイファスの批判から始まった。マクダウェルは著書『心と世界』で次のように主張する (McDowell 1996)。彼はセラーズによる所与の神話説批判を重く受け止め、センスデータの重要な概念的内容を持たない感覚的所与が信念を正当化することを否定する。しかしその一方で、信念の正当化において経験の重要性を切り捨てるドナルド・デイヴィドソンの斉合説 (Davidson 1990) もまた彼は批判する。そのうえでマクダウェルは、私たちの知覚経験が常にすでに命題的なものであるという意味で「概念的」だとする自身の立場を主張している。

マクダウェルは後に論文『Avoiding the Myth of the Given』の中で、知覚経験の内容を概念的でありながら非命題的なものであるとして立場を少し弱めている (McDowell 2009)。しかし本稿では、彼を論争の時期に限って扱う。すなわち、「概念的」であるとは「命題的」だという主張と等しいものとして扱う。そして「命題」は「言語」によって構成される。したがって本稿では、「概念的」を「命題的」あるいは「言語的」と等しいものとして扱う。

この主張に対してドレイファスは、非概念的な知覚の存在を反例としてマクダウェルに対して提示する。すなわち彼は、言語的でないあるいは命題的ではないという意味で、「前言語的」や「前命題的」である非概念的なケースを反例として提示する。両者の論争について本節の残りの箇所では、特に〈知覚〉に焦点を当て、ドレイファスの批判を検討する。第三節では〈世界〉の捉え方の違いに焦点を当てる。

## 二一 二 前言語的な〈知覚〉について

ドレイファスらはマクダウェルに対して「前言語的」な知覚が存在しており、これはまだ言語化されていない故に非概念的な知覚のケースだと主張する (Dreyfus & Taylor 2015, p.84, 85 [邦訳一三八―一四〇頁])。それは次のような具体例で説明される。

日常的に川を渡つて森に遊びに行く少年を例として考える。彼は頻繁に森に遊びに行っているが、その際「都合よく配置された石」を跳んで川を渡っていた。少年はその「石」を表す「跳び石」という語彙を持っていなかった。ある日、年上の親戚が彼のもとに遊びに来た。その親戚は一緒に森で遊びたいと思い、「その森に行くための跳び石はあるのか？」と少年に尋ねた。少年は「跳ぶ」や「石」という語彙をすでに有していたため、親戚の質問は普段自分が使っている「都合よく配置された石」を指すと理解し、「うん」と答えた。この時初めて、少年は石を指す「跳び石」という語彙を、命題を用いた概念的思考に現れうるものとして手に入れた。したがつて、それ以前の少年は川を渡る際に「跳び石」を非概念的に認識してたと考えられる。少年はその語彙を有していなかったために、その認識は「前言語的≡非概念的」なものと呼ばれる。

この事例が示すのは、少年が「跳び石」という語彙を獲得するまでは、非言語的な形で少年に現れていた対象が存在するということである。そしてここから、接触説は〈知覚〉と〈世界〉について非概念的な部分が必然的に残されていると主張する。というのも、この新たな語彙の獲得による分節化の拡張可能性は、常に残されているためである。このことは、マクダウエル概念主義の誤りを指摘すると考えられている。

しかしこの事例は、〈知覚〉については重要ではないと思われる。ここでは、マクダウエルに対する二通りの反論を読み取ることができる。一つは、知覚経験の内容に対するさらなる概念化が常に可能だ、という反論がある。しかしこの主張は、次に確認する前命題的な事例にもあてはまる。

もう一つは、知覚経験の内容を表す語彙を有していないために、その知覚は非概念的と呼ばれるべきだという反論が考えられる。この点が、前言語的なケースと前命題的なケースを区別するポイントだろう。しかしこの反論について、仮に「語彙を獲得しなければ、決してその対象を概念的思考内に含めることができな」と解釈するならば、私たちの経験内容の豊かさをドレイファスらは説明できなくなる。例えば、様々なコーヒーを飲んでそれぞれの味わい深さに関する思考を彼らは説明できない。というのも私たちは、個人差はあるだろうが、個々の味わいのケースについてすべてを語りつくせるだけの

語彙を有していないし、また語彙を学習し尽くすことも不可能だと考えられるためだ。しかし実際には、私たちは個々の経験に則した思考をすることができるとは限らない。したがって、このような解釈の下での前言語的なケースによる反論は適切でない。

以上より、マクダウェルに対する反論として、前言語的なケースに独特の利点はないのではないか。したがって、ドレイファスのマクダウェルに対する批判のポイントは、「さらなる概念化が常に可能だ」という点にあると考えられる。この主張は、次に確認する前命題的な知覚の例にも当てはまる。このケースを確認したうえで、マクダウェルとドレイファスの主張の内どちらが適切なものであるか検討する。

### 二一三 前命題的な〈知覚〉について、マクダウェルへのさらなる反論

次に「前命題的」なケースについて検討する。このケースは、仕事場に向けて車を運転している人を例に説明される(Dreyfus & Taylor 2015, pp.86-88 [邦訳一四〇—一四三頁])。車を運転している間、その人は職場での問題などに頭がとらわれているが、同時に障害物を避けて運転している。この事例で彼は、いわゆる没入的対処として車の運転をしている。その後、オフィスにつくと、近所で不審者が出没しているという話を耳にした。その不審者は黄色いベンツに乗っているらしい。この話を聞いて、彼は突然「5分前にグリーンストリートで黄色いベンツを見た」ということに気がついた。この時初めて、彼は「8時55分にグリーンストリートに黄色いベンツがいた」という命題的な信念を形成したのである。この信念に基づき、彼は警察に通報したりすることができるようになる。この信念は、彼のグリーンストリートに関する熟知を利用して構成される。そしてこの熟知は、運転中に手に入れられたものである。しかし、この熟知の内容は、オフィスに到着して不審者の話を聞くまでは、信念の形成に用いられなかった。この運転手の例は、川を渡る少年の例と同様、非概念的な知覚の具体例だといえる点では同じである。しかし少年とは異なり、この運転手は「黄色いベンツ」という語彙をすでに有していた。この点から少年の「前言語的」なケースとは区別され、「前命題的」な事例とされる。

このケースについてマクダウェルはなお、知覚経験の内容は概念的だと主張するだろう。しかしこの主張は、各々の信念「主体」という観点を十分に捉えていないように思われる。そして、本稿では知覚経験と知識を議論する上で、この観点を見逃すべきではないとマクダウェルに反論したい。

このさらなる反論の根拠として、認識論の外在主義に対する批判がある。外在主義は知識の正当化の根拠が、主体のアクセス外にあっても構わないと主張している。例えば外在主義の一つに数えられる信頼性主義は、信念形成のプロセスの信頼性のみによって信念を正当化することができると主張する (Goldman 1979)。しかしこの主張には、「私たちが実際に知識を持っている」ということを「私たち自身が」説明することが不可能なケースを許容してしまうという、いわゆる「認識論的無責任」の問題を提示しうる (伊勢田二〇〇六、一〇頁)。これと同じ指摘を、概念主義者に対してもできるのではないか。というのも主体の概念能力の熟達度などによつては、その知覚内容から判断や正当化を含む概念的思考ができないケースも当然に考えられるためである。そのような知覚内容は、もはやその人の〈理由の空間〉に属するべきではない。したがってそれは、正当化の一要素とされるべきではないだろう。そして〈理由の空間〉に属するべきではないものはまた、「概念的」と呼ぶべきでもないだろう。したがってこの〈知覚〉という点については、ドレイファスの主張が正しいといえる。

### 三 論争の対立点〈世界〉について

マルクス・ガブリエルらは、論争のきっかけとなった『心と世界』について「マクダウェルの概念分析の努力のほとんどすべてが「心」に費やされており、「世界」はほとんど言及されていない」と指摘する (ガブリエル&ジジェク二〇一五、六三頁)。しかし本稿では、マクダウェルの〈世界〉に関する少量の記述は有益であり、特に「飛躍の問題」の回避に役立つと考える。本節ではマクダウェルとドレイファスの〈世界〉についての対立点を整理するとともに、ドレイファスの問題点を

指摘する。その後第四節では、これらの議論に基づいて「飛躍の問題」を避けることのできる本稿の第三の立場を示す。

### 三― 両者の考え方

〈世界〉についても、マクダウェルとドレイファスは対立している。ここでも、両者はそれが概念的か非概念的かという点で対立しており、マクダウェルは世界がすでに自然言語によって概念化されていると主張する。彼によると私たち人間は、自然言語を身に着けることで概念能力を獲得する。この自然言語は、「何が何の理由であるかについての知恵を歴史的に蓄積」している (McDowell 1996, p.126 [邦訳二〇八頁])。この自然言語を身に着ける、すなわち概念能力を獲得することで、私たちの目は理由一般に開くようになる。このようにして私たちは、自然言語を身に着けることで、〈世界〉を理由を持つものとして知覚し、その理由にしたがって行為したり、その理由を基に他の信念を正当化したりすることができるようになる。したがってマクダウェルは〈世界〉を、自然科学的に探究されるにすぎないような、単なるモノの集合としてとらえてはいない。彼は〈世界〉が、行為を促したり信念の正当化の根拠となるような、規範性や意味をすでに持ったものと考えているといえる。ただし、それらはすべて概念化し尽くされている。

ドレイファスも同様に、〈世界〉がすでに規範性や意味を持っていると考えているだろう。第一節で確認した没入的対処についての彼の主張の内には、行為を「最適さ」が導いていくという考えがあった。そしてこの「最適さ」は、サッカー選手であれば対戦相手といった、知覚の対象である〈世界〉が有しているものだった。この点から、ドレイファスはマクダウェルと同じように、単なるモノの集合以上のものとして〈世界〉をとらえているといえる。

しかしドレイファスは、世界にも非概念的な要素があると主張し、マクダウェルと対立する。それは「前言語的な知覚」の事例と関連して確認したように、私たちは語彙の獲得を通じたさらなる概念化の可能性を持つことを根拠としている。ドレイファスらは「分節性の範囲は拡張可能だという意味では、人間世界が完全に分節化されることは決してない」と主張す

る (Dreyfus & Taylor 2015, p.85 [邦訳一三九頁])。引用箇所では「前言語的」な事例についてのみ語っているが、もう一方の「前命題的」な意味でも、このさらなる分節化の可能性は主張できるだろう。また、ここで言われている「分節化」は、あくまでも言語による分節化であり、本稿の言葉遣いからすれば「概念化」されていると言い換えることが可能である。

したがって両者は〈世界〉を、自然科学的に探究されるにすぎないような、単なるモノの集合としてはとらえていないという点では共通している。両者はともに、〈世界〉が行為を促したり信念の正当化の根拠となるような、規範性や意味をすでに持ったものと考えているといえるだろう。そしてこの「意味のネットワーク」としての〈世界〉を、マクダウェルはすべてが常に概念化し尽くされていると主張するのに対して、ドレイファスらは非概念的な要素が常にあると主張し対立している。

### 三二 接触説の問題点

ドレイファスらの〈世界〉についての非概念的なとらえ方は、「飛躍の問題」を引き起こす。この問題は、非概念的な〈世界〉〈知覚〉と概念的な信念との間の、直接的な正当化関係を疑問視するものだった。本稿ではこの点について、マクダウェルのように〈世界〉を考えることで、疑問の解消が可能であると提案したい。それに先立ち、ドレイファスらの抱えている問題点をさらに指摘する。

ドレイファスらは〈世界〉の非概念性の根拠として、前言語的な事例を挙げているが、その適切性は疑わしい。確かに、私たちの〈知覚〉には前言語的、あるいは前命題的という意味で非概念的なものが含まれるだろう。それは、少年の例のようにまだ知らない語彙が含まれるからかもしれないし、運転手の例のように、まだ信念を形成していないからかもしれない。また、私たちの知覚は、通常対象の一面面をとらえることしかできない。それは「物理的」にある特定の角度からしか眺めることができないという意味でも、サッカーボールを「蹴るため」に知覚するのか「飾るため」に知覚するのかといった、

「意味論的」な意味でも正しいだろう。この点は第二節で認められた。

しかし、これらの非概念性はあくまでも各主体と相対的なものである。したがって、〈世界〉そのものについても、このような非概念性を認める必要はないだろう。というのも〈世界〉は、あくまでも私たち主体とは独立した、客観的なものであるということはマクダウェルもドレイファスも認めており、また直観的にも支持すべき主張であると考えられるためである。ドレイファスはここで、〈知覚〉と〈世界〉について、同じ一つの点からマクダウェルを批判している。もちろん知覚と世界は密接にかかわっているため、それらを合わせて考察することは重要だろう。しかし「主体」を重要視して考えると、〈世界〉についてドレイファスのように非概念性を認めるべきではない。

したがって、この〈世界〉に関する議論はドレイファスが誤っているように思われる。他方のマクダウェルに関しては、本節のはじめでも指摘したように記述が十分でない。しかし、本稿の目的である「飛躍の問題」の回避のためには、マクダウェルの〈世界〉の考え方は有用である。彼の考えを用いて両者の論争の水掛け論のような困難を乗り越え、さらに「飛躍の問題」を回避することができると思われる。次節では本稿の第三の立場を示したのちに、マクダウェルとドレイファスとの関係性を整理することでこの立場の位置づけを明確にする。

#### 四 第三の立場についての考察

ここまでの議論を通じて以下のことを検討した。まず第一節では、ドレイファスらの主張する接触説には「飛躍の問題」が含まれていることを指摘した。その後、第二節と第三節を通じて、マクダウェルドレイファス論争を〈知覚〉と〈世界〉という観点からまとめ、両者の主張を検討した。その結果〈知覚〉についてはドレイファスの主張が、〈世界〉についてはマクダウェルの主張が、よりよいということが明らかとなった。両者の対立点は、知覚と世界という二つの領域を一体的に捉

えたうえで、そこに「概念的」と呼ばれる要素が遍在しているか否かという点にある。しかし本稿の第二節第三節で示されたのは、知覚と世界のそれぞれの事例について問題を抱えているということである。したがって、個々の事例を区別したうえで理解すべきではないだろうか。

しかし本来のマクダウェルやドレイファスには知覚や世界について、本稿では十分に焦点を当てていないが行為についての検討も通じた、心と世界に関する包括的な理論であるという大きな魅力がある。最後にこれまでの検討を踏まえた、本稿が主張する第三の立場をまとめ、考察する。この立場は、これまでの議論で示された批判に陥らないという利点を持つと同時に、接触説にとつて問題となっていた「飛躍の問題」に陥らないという新たな説明力を持つている。またこの立場をマクダウェル、ドレイファスと対比する形で整理することで明確化する。

#### 四一 第三の立場について

ここまで、マクダウェルとドレイファスの議論を整理してきた。両者の対立点は多岐にわたるが、本稿では〈知覚〉〈世界〉の捉え方に焦点を当てた。

「飛躍の問題」は、知覚経験と信念・知識の間にある。この関係が正当化関係と認められるような合理的関係でなければ、結局のところ接触説は退けられてしまうだろう。この問題を避けるためには、マクダウェルによる〈世界〉の捉え方に着目する必要がある。

私たちの非概念的な知覚は、没入的対処の際におこるものだった。没入的対処がうまくいっているとき、私たちは世界のもつ「最適さ」に引き寄せられるようにして行為をしている。したがって没入的対処の成功は、「意味のネットワーク」としての〈世界〉を正しく知覚し、行為していることを意味する。この知覚対象である〈世界〉はマクダウェルの主張に則り、自然言語によって概念化されていると考えることができる。そしてこの概念化は、諸信念が正当化される〈理由の空間〉と



同じようにして概念化されている。

しかし、〈知覚〉の分節化された内容はまだ「概念的」と呼ぶべきではない。というのも、各主体はそれぞれ有する語彙やその時々目的によつてさまざま知覚をしており、すべての側面について命題的に概念化された知覚経験を有しているとは言えないためだ。非概念的な〈知覚〉が〈理由の空間〉に入る際には、没入的対処において常に可能であつた反省することを通じて、ただその分節化にしたがつて「判断」され命題的な内容へと概念化されれば十分であろう。

ドレイファスは〈世界〉には常に非概念的な要素が含まれていると主張しており、この点が彼に「飛躍の問題」をもたらしめた。それに対して、〈世界〉もすでに概念化されていると捉えれば飛躍は存在しなくなる。概念化された世界を正しくとらえているとき、すなわち没入的対処がうまくいつているとき、その正しい知覚内容は同じような形で理由の空間に現れることができるよう、分節化されている。したがつて、このような知覚経験の内容は理由の空間に含むことができるよう分節化されており、かつそれは分節化された〈世界〉を正しくとらえているために正当化されたものである。しかし、この分節化された内容は判断以前であり、したがつてまだ命題の形にはなっていないため、マクダウエルの言う「概念的」要素となっていない。このような分節化されているが、命題的な形でないため「非概念的」と呼ぶべき知覚を私たちは持つている。これらは命題的であるか否かという点では異なっているが、常に同じように分節化されている。したがつてそこには、全くの非概念的な次元から、人間の反省によつて命題を形成し概念的な信念を形成、正当化するという「飛躍」は存在せず、共通の「分節性」という根柢を持つている。このことは飛躍の問題の回避を可能にする。

このようにして、適切な対処を導く正しい知覚経験に基づき、私たちは正当化された信念を獲得し、それによつて他の信念を正当化することもまた可能となる。それは〈世界〉から〈知覚〉を経て〈理由の空間〉に至るまで同じように分節化されているために、飛躍の問題を生じない。

#### 四十二 マクダウエル、ドレイファスと第三の立場の比較

この第三の立場はマクダウエル、ドレイファスとそれぞれどのような関係にあるのか。最後にこの点を整理する。

まず〈知覚〉について、第三の立場はドレイファスと同じ立場に立つ。すなわち〈知覚〉には、非概念的な要素が含まれていると考える。それは「主体」を重要視するためである。少年らの例でみたように、私たちの知覚経験の内容は語彙の獲得などによってさらなる概念化の可能性を持つ。また、知覚は物理的にも意味論的にも常に一側面からのものであり、その内容がすでに概念化し尽くされているということはないだろう。この点に基づいて、本稿の第三の立場はマクダウエルと対立しあくまでもドレイファスの側に立つ。

次に〈世界〉について、第三の立場はマクダウエルの側に立つ。それはドレイファスの主張の困難に基づく。ドレイファスらは知覚のさらなる分節化可能性に基づき、世界も同じような分節化可能性を持つためにまだ非概念的な部分が常にあると考えている。しかし、このさらなる分節化可能性は、主体と相対的なものであった。このような分節化可能性に基づく非概念性を、〈世界〉にまで認める必要はない。第三の立場は、この点でドレイファスに対して批判的な立場をとりマクダウエルの側に立つ。

そして以上のように〈知覚〉についてはドレイファスの立場に、〈世界〉についてはマクダウエルの立場に立つことで本稿の立場は、ドレイファスらの接触説にとって問題となっていた「飛躍の問題」を避けることができる。というのもこの問題は、概念的な正当化の根拠を非概念的なものにしか求めることができな点にあった。前節で示したように、本稿で示した第三の立場は概念的な世界を根拠とした知覚であるために、正当化の根拠を概念的な〈世界〉に求めることができる。このように考えることで、〈知覚〉と〈世界〉についてマクダウエルとドレイファスのそれぞれが抱えていた問題を避けつつ、「飛躍の問題」に陥らないという新たな利点を持った正当化のテーゼを主張することができる。

## おわりに

本稿の議論全体を通じて、マクダウェルドレイファス論争を踏まえた第三の立場を考案した。この立場は四一二でまとめたように、〈知覚〉についてはドレイファスと同じように、〈世界〉についてはマクダウェルと同じように考える。このように考えることで、それぞれに対してすでに指摘されている問題を回避することができる。また正当化の根拠を〈世界〉に求めることで、第一節で新たに指摘した「飛躍の問題」に陥らないより良いものであるといえるだろう。

なお、本稿で参照したマクダウェルドレイファス論争のマクダウェルの主張は、「知覚や行為は隅々まで概念的（＝命題的）なものである」というかなり強いものである。二一でも述べたように、彼は後にその主張を少し弱めており、弱めた後の主張と本稿でのマクダウェル批判および第三の立場についてはさらなる検討の余地がある。ただし、論争相手であるドレイファスは、マクダウェルと論争を交わした後の著作である『實在論を立て直す』中でも、マクダウェルにこのような強い主張を帰属させつつ批判している。したがって本稿の議論も、マクダウェルに対する一つの視点からの考察として一定の意義があると言えるだろう。

## 註

- (1) このように接触説の主張する「正当化」は、他の信念による理由付けを正当化の典型例とみなす内在主義とは大きく異なっているように思われる。接触説はむしろ、内在主義と対立する立場である外在主義、特に信頼性主義と類似しているという指摘もある（村田、荒畑、井頭、植村二〇一七）。筆者はこの指摘について、接触説と外在主義の間には決定的な違いがあると考えているが、この「内在主義・外在主義と接触説の関係」という問題に関しては稿を改めることにしたい。

## 参考文献

- Davidson, Donald. (1990) "A Coherence Theory of Truth and Knowledge" in Alan Malachowski (eds.), *Reading Rorty* (Basil Blackwell 1990), pp.120-138 [「ナナルド・デイヴィッドソン、一九八三年「真理と知識の斉合説」(「主観的・間主観的・客観的」清塚邦彦、柏端達也、篠原成彦訳、春秋社、二〇一三年、二二八-二五二頁) ]
- Dreyfus, Hubert L. (1991) *Being-in-the-World A Commentary on Heidegger's Being and Time, Division I*, MIT Press [「ユーバート・ドレイフス、二〇〇〇年『世界内存在——存在と時間』における日常性の解釈学——」門脇俊介監訳、産業図書]
- Dreyfus, Hubert L. (2001a) "Todes's Account of Nonconceptual Perceptual Knowledge and its Relation to Thought" in Mark A. Wrathall (eds.), *Skillful Coping: Essays on the Phenomenology of everyday perception and action* (Oxford University Press, 2014), pp.92-103 [「ユーバート・ドレイフス「非概念的な知覚的知識と思考との関係——サミュエル・トーデスの知覚論——」鈴木貴之訳、岩波書店、『思想』No.949、二〇一三年、一二五-一四一頁]
- Dreyfus, Hubert L. (2001b) "The Primacy of Phenomenology over Logical Analysis" in *Skillful Coping*
- Dreyfus, Hubert L. (2013) "The Myth of the Pervasiveness of the Mental" in Joseph K. Schear (eds.), *Mind, Reason, and Being-in-the-World: The McDowell – Dreyfus Debate* (Routledge, 2013)
- Dreyfus, Hubert L. and Taylor Charles. (2015) *Retrieving Realism*, Harvard University Press [「ユーバート・ドレイフス、チャールズ・テイラー、二〇一六年『実在論を立て直す』村田純一監訳、法政大学出版局]
- ガブリエル・M、シジエク・S (2015) 『神話・狂気・哄笑——ドイツ観念論における主体性——』大河内泰樹、斎藤幸平監訳、堀之内出版
- Goldman, A. I. (1979) "What is Justified Belief?", in George S. Pappas (eds.), in *Justification and Knowledge*, D. Reidel Publishing Company, pp.1-23
- Goldman, A. I. (1986) *Epistemology and Cognition*, Cambridge: Harvard University Press
- ハイデガー・M (2017) 『存在と時間I』原佑、渡辺二郎訳、中公クラシックス

飯嶋裕治 (2017) 「マクダウェルドレイファス論争における「概念能力」への問い——われわれは没入的対処において何に反応・応答しているのか」(『哲学論文集』第五十三輯、九州大学哲学会、二〇一七年九月) 一—二二頁

伊勢田哲治 (2006) 「認識論における非個人主義的内在主義」(『哲学の探求』第三十三号、哲学若手研究者フォーラム、二〇〇六年、七一—二二頁)

McDowell, John. (1996) *Mind and World With a New Introduction by the Author*, Harvard University Press [ジョン・マクダウェル、二〇一二年『心と世界』神崎繁、河田健太郎、荒畑靖宏、村井忠康訳、勁草書房]

McDowell, John. (2007) "What Myth?", *Inquiry*, vol.50, No.4 [ジョン・マクダウェル、二〇〇八年「なんの神話が問題なのか」萩原理記『思想』No.1011 岩波書店、二〇〇八年七月) 六〇—七九頁]

McDowell, John. (2009) "Avoiding the Myth of the Given" in *Having the World in View: Essays on Kant, Hegel and Sellars*, (Harvard University Press, 2009) pp.256-272

McDowell, John. (2013) "The Myth of the Mind as Detached" in *Mind, Reason, and Being-in-the-World*

村田純一、荒畑靖宏、井頭昌彦、植村玄輝 (2017) 「ワークショップ報告『媒介論的描像を抜け出して多元的实在論へ——ドレイファ

ストテイラーの現象学』(『現象学年報』第三十三号、二〇一七年)

Searle, John R. (1983) *Intentionality An Essay in the Philosophy of Mind*, Cambridge University Press [ジョン・サール、二〇〇九年『志向性』坂本百大監訳、誠信書房]

Sellars, Wilfrid. (1997) *Empiricism and the Philosophy of Mind*, Harvard University Press [ウィルフリッド・セラーズ、二〇〇六年『経験論と心の哲学』浜野研三訳、岩波書店]

Taylor, Charles. (2013) "Retrieving Realism" in *Mind, Reason, and Being-in-the-World*

Todes, Samuel. (2001) *Body and World*, MIT press

(九州大学大学院・博士後期課程)